

冬にキャビア初出荷へ

チヨウザメ研究

国内で唯一産業化をめざし、チヨウザメを研究している小林市の県水産試験場小林分場
＝写真。地方の水産試験場では初めてチヨウザメの稚魚を人工ふ化し、今年の冬にはキャビアも初出荷できそう

生物利用部農学博士特別研究員副部長の稲野俊直さん(47)に、その意義や施設の役割について聞いた。

に合わせて大きな水槽に移す。卵を産むようになるには約8年かかり、体重は50キロになる。人の手で産卵をしむけるため、水槽に移すのにも3、4人がかりの大変な作業となる。

小林分場は、広大な敷地内に屋外水槽を22面持ち、飼育棟の面積は1085平方メートル。研究員は4人。養殖をふきゆうし、県の産業にしたいという目

で研究が始まり、1983(昭和58)年国からチヨウザメの稚魚200匹が送られた。小林市の湧き水は水温17度ということも飼育に適している。

稚魚は現在10万匹。小さな水槽から、成長

私が取材しました



記者NO.1003
小林市・細野小5年
中ノ神 ひいり
趣味：読書

取材は緊張したが、チヨウザメの魅力を知ることができて勉強になった。記事をまとめるのは難しかったが、書き上げた達成感を味わえ、とても楽しかった。



稲野さんは「チヨウザメ産業が大きくなれば10年後は100億円産業になる可能性もある」と期待を膨らませる。